



とあるおもちゃ会社の研究所。受付でその場所を聞けば、地下にあるという。エレベーターで地下3階まで降下、右手に折れ突き当たりの、これまたクラシックな手動のドアの前に立つ。

「で、でえっきましたああ！！」

「出来たか。あとは試すだけだな」

「こんなにもリアルなロボットはそうそうないと思いますよ！」

「そうだな。山川研究員」

「所長！！」

なんて声の中から聞こえる。こんなところに入っていきのはいやだと思いつつ、そっとドアを開けると案の定、むさ苦しい男達が、がし！ と抱き合っているのが目に入った。

仕事だ。と、自ら言い聞かせ、満面の笑みでいつもの台詞。

「こんにちは。夢のお菓子をお届けするフォーチュンサービスのテラーです。ご注文のケーキをお持ちしました」

すると抱き合っている男達はこちらを見て、いぶかしげにこちらを睨んだ。

「あ？ そんなものを頼んだ覚えは……」

するとひよろひよろの男が、うれしそうに言った。

「所長！ 私が頼みました！ だって今日は記念すべき日じゃないですか！」

「そうだな。そうだと！！ 山川研究員！」

またもや、ぐわっしと熱い抱擁を交わすふたりに、半ばあきれつつ届け物をそばの机の上に置く。

「要冷蔵ですので、お早めに召しあがってください。もしも保存される場合は冷蔵庫に入れてください」

営業文句を口にしてしていると、すぐそばのベッドで、子どもが横たわっているのに気が付いた。でも、よく見れば肌の質感が若干違うような……。

「……これまさかロボットですか？」

そう言ってみると、山川研究員さんが見開いた目をきらきらとさせた。

「かわいいでしょう！」

「あ、ええ……まあ」

たしかにかわいい顔をしているが、こんなにリアルなロボットを見るのは初めてだ。

「子どもの仕草や声をリアルに再現したんですよ。普段はお手伝いロボットですが、夜になると……」

ふふふと所長が笑う。まさかと思うが。

「夜になると、あんどんの油でもなめるんですか？」

言ってみたら思い切り顔をしかめられてしまった。

「いったいどの時代の人間だね、君は」

「これは失礼。昨日日本の古典映画を見ていたものですから……」

照れ隠しに頭を掻く。

「夜になると眠り、次の日夢の内容を語って聞かせてくれるのだ」

「夢を？ ロボットが夢を見るんですか！？」

「そうだ。昼間に見聞きしたことや、飛んでいる電波などを捕らえてランダムに組み立て、ストーリー仕立てにして語ってくれる。夢というものは、日常生活でものすごく重要だという位置づけだ。夢見が悪いと一日嫌な気分になるが、反対によい夢だと気分もよいだろう？」

そこで合点がいった。

「昨今の夢グッズブームにあやかるうってことですね」

「察しがいいな、君」

所長はうれしそうに微笑んだ。

「昼間は家政婦ロボットとして留守番から食事の用意まで何でもこなす。このリアルさだ。子どもがない夫婦や、孫がほしいおじいちゃんおばあちゃん、さらに独り暮らしのサポートにも最適と考えている。そこでだ、君。この試作機のテストに一役買ってくれまいか。我々作り手は愛着があるから、冷静に判断しかねる。第三者的視点がほしいのだ！」

熱烈に語る所長の横で、山川研究員がほろりと涙を流した。

「一人娘を……嫁に出すような気分です。所長」

「そうだな。……『ゆめとくん』は男の子だがね」

しみじみと、まさに結婚前夜の夫婦のように浸っているふたりを眺め、どうということかと考えていた俺のシナプスはようやく繋がった。

「え！？ 嫁って！？」

ロボットとはいえこんなリアルな男の子連れて帰れと言われても抵抗がある。なんとかして断ろうと思ってとりあえず失礼なことを言ってみた。

「番犬にはむかないですか？」

「番犬とはなんだ。こどもにそんなことをさせるのか！」

「い、いえ。留守番を頼むのにそれくらいのはしてくれないのかなあと」

「もちろん、セキュリティ機能も万全です。オプションで催涙ガスと迎撃ミサイルをおつけすることが出来ますが、いかがいたしますか？」

どこの世界にそんなものをもっている子どもロボットがいるか！

「……結構です」

そうこうしていると、所長が大きなレバーをがちゃんとさげた。

「機動！！」

すると、軽いモーター音を響かせながら、子どもが起きあがった。

「『ゆめとくん』だ」

自慢げに胸を張る所長に、子どもがなめらかな口調で言った。

「おはようございます。所長。こちらの方がテストマスターですか？」

「ああ、そうだと『ゆめとくん』。君は明日のお昼まで彼と一緒に過ごしたまえ。報奨金はその時に渡す」

くるくると大きな瞳で『ゆめとくん』はそれはかわいらしくにっこり笑った。

「ちょ、ちょっとまって、一緒につれて行くとは言ってないぞ。断じて言ってない」

金はちょっとほしいけど……なんて思っていると『ゆめとくん』はうっすらと涙を浮かべ、悲しそうに俺を見上げた。

「だ、めなんですか？」

うるうると目を潤ませながらおねだりポーズをする『ゆめとくん』に、軽い頭痛を覚えながら天を仰ぎ、観念して答えた。

「……かりました。お預かりします。ただし一日ですよ？」

「感謝する。……それで君。名前は？」

名前すら知らない人間に大切なロボットを託そうとする彼らに、一言言ってやろうと思ったが、いい文句が浮かばず、俺は口をつぐんだ。

仕方なく会社に『ゆめとくん』を連れて帰ることにしたが、この『ゆめとくん』、なかなか使える。宇宙船の発着も彼の制御装置で難なくクリア、いつもならデブリで手間取る会社への道もするすると戻ることが出来た。それだけではない。会社に戻れば戻ったで、『ゆめとくん』のかわいらしさに羨望のまなざしで見る。

「この子がロボットなの？」

「すごいな。普通の男の子にしか見えないじゃないか」

「かわいい！！」

わらわらと寄ってくる配送の人間を蹴散らしていると、『ゆめとくん』は極上の笑みを浮かべて言った。

「こんにちは、みなさん。今日はテラーさんに僕をモニターして頂くため、同行させて頂くことになりました。ご迷惑をおかけすると思いますが、一日よろしくお願いします」

すると、社内から激しい拍手がおこった。

お茶を煎れてもらえば、温度から味までばっちりなものを煎れてくれるし、コピーだ報告書だ、なんて雑務も瞬時にやってしまう優秀なロボット。

「普通の男の子の外見でいったいどれだけ高性能なんだ？！」

質問すると、『ゆめとくん』は笑顔で答えた。

「外見は十歳の子どもをモデルに細部にこだわりリアルを追求して作られましたが、メイン機能は最新お手伝いロボット並みですよ」

「ああ～ん、私も『ゆめとくん』ほしいなあ」

女の子達がそう色めきだち、『ゆめとくん』は、はにかんだ笑顔で答えた。

「僕が市販されたら、お願いしますね」

営業もばっちりだ。

ひとしきりの業務を終え、家路につく。『ゆめとくん』が材料を買って作ってくれた、久々の家庭料理に舌鼓を打ちつつ、他愛のない話で夜を過ごす。こういうのも悪くないと思う。

シャワーを浴びて着替えていると、持参のパジャマに着替えた『ゆめとくん』が枕をだっこして寄ってきた。

「……なに？」

「あのお……一緒に寝てもらえませんか？」

もじもじとする『ゆめとくん』に、顔をしかめる。

「え？ や、だってお前ロボットだろ？ 重いだろ？ それにシングルベッドにふたりは狭すぎ……」

「体重は重力制御で十代の子どもくらいになってます。それにマスターが横にいてくださらないと夢トレース機能がうまく作動しなくて……。お願いします」

うるうると目を潤ませて枕に口元を埋めてかわいくおねだり……。そういえばこいつ、夢を見て明日の朝聞かせてくれるんだった。と、今更思い出した。俺はベッドに先に横になり、

「……じゃあ、こっち来いよ」

『ゆめとくん』は、ほっとしたように笑って、もぞもぞとベッドにもぐりこみ、顔をぴよこんと出してにっこり笑った。

「おやすみ」

電気を切ると、

「おやすみなさい」

ゆめとくんの声がすぐそこでしたが、すぐに眠ってしまったらしい。寝息が聞こえた。じっとしていると布団が暖まっているのに気が付いた……ってか、湯たんぼ機能？

そのぬくみにほっとしつつ、やがて俺も眠りに入った。

が、真夜中、腹の上に重みを感じて目を覚ました。目の前に『ゆめとくん』のさらさらの髪、腹の上にはその足がのっかっていた。

「どんな寝相してるんだ」

ぶちぶち言いながらその足をどけてみる。すると今度は口の中でぎりぎり歯ぎしりをはじめ、拳げ句の果てには、

「かつどんうまい～」

と寝言を言う始末。俺は眠りを妨害されて、腹が立っていた。

「おい、起きろ！」

乱暴に揺り動かしてみれば、顔面に裏拳を食らい、鼻血が。うわ、ちょっと待てとティッシュを探していると、『ゆめとくん』はベッドの上を眠ったまま縦横無尽に移動し始めた。

怖い……。目を開けたままだぞ？ どうなってるんだ？ スイッチはあるのか！？

しかし少し探してみたが止める手段はなく、仕方なく俺は狭いソファに移動し、バスタオルを腹に掛けて就寝した。その間も『ゆめとくん』の寝言と歯ぎしりは、止むことはなかった。

次の朝、上機嫌に目覚めた『ゆめとくん』は、昨夜見た夢を聞かせた。どうやら『ゆめとくん』は刑事物の夢を見ていたらしい。無実の罪で牢屋に入れられ、取り調べの際食べさせられたカツ丼のうまさに感動したのだと無邪気に話した。

「あ～そ～ですか～。でもあの歯ぎしりとか寝相とか、なんとかならんのか」

「リアルを追求した結果です。我慢してください」

……絶対こんなもの、売れるか！

大体、ロボットが人間に我慢とか言うな！

身支度ももどかしく『ゆめとくん』を車に押し込み、そのまま研究所へ返却に行った。

一年後。

発売された『ゆめとくん』は、俺の予想に反して、売れに売れまくった。夢トレース機能に寝相占いも追加されたことで、若い女性に人気だとか。中にはトレース機能で寝ている間の行動を観察し、健康管理に役立てる人もいるようだ。

でも今売れている人形には表情がなく、動きも妙になめらかで、リアルではない。

やはりリアルすぎる『ゆめとくん』はコストがかかりすぎて、廉価版を出すことにしたそう。発売のお祝いケーキを届けに行くと、所長と研究員は涙ながらに語ってくれた。

「やはりリアルがいいのじゃ～～！！」

なんていいながら。

そして、リアル『ゆめとくん』は、未だに俺の家にいる。

頑固親父よろしく

「嫁に出したのだ。出戻りゆるさん！」

等と言ってがんとして受け取ってもらえず、また『ゆめとくん』の

「だめですか？」

ってうるうる瞳にほだされてひきとることになってしまった。

いきなり「十歳の子ども」の親になった俺は、隠し子の疑いをかけられ、女を家に連れ込むことも出来なくなったが、不満はない。毎日のうまい飯に家の中も始終ぴかぴか。こんなできた嫁をもらうというのも昨今では難しいんじゃないかと思う。

そして.....、

「マスター、行ってらっしゃいませ」

「.....行ってきます」

今日も『ゆめとくん』の寝相パンチで腫れた顔で、出勤するのだった。

宇宙一のおもちゃ屋さん「SAMAYA」。

おもちゃと名の付く物はすべて売ってます。中には指先が味覚を感知する手袋とか、実際に撃ててしまうけど、絶対に怪我をしないレーザー銃とか、プールの水を全部ゼリーにしてしまう粉末なんてのもある。

私は、そこで営業の仕事をしているの。

その日も外回りから帰ってきて報告を済ませ、さあ帰ろう、と思ったら、部長に呼び止められた。

「ミスミ君。第三研究室に行って、現在の進行状況を見てきてくれないか？ その後直帰していいから」

出た。第三研究室。通称三研。技術開発部の厄介者をリストラする目的で作られた窓際部署。

しかし彼等が開発した、寝相占い付きお手伝いロボット「ゆめとくん」は、かわいらしさと高性能で爆発的に売れ、今その女の子バージョンを開発中だ。

「私、あそこ初めてですが」

「見てくるだけでいいから、ね？」

部長命令じゃあしかたない。早くすませて帰ろうっと。私は手早く片づけると身支度をし、営業部を後にした。

正面エレベーターに乗りこんで、地下三階のボタンを押すと、

「ま、待って下さい！」

大声で呼び止められ、慌てて開ボタンを押して待っていると、男の人が飛び込んできた。胸元のタグを盗み見ると、シレルさんというらしい。

「ありがとうございます。ところで、三研に行かれるのですか？」

私の手元を見ながら彼は言った。

「え、まあ」

その優しげなまなざしにドキっとしながら曖昧に返事をすると、

「地下三階はあの部屋しかありませんからね」

彼は微笑みながら地下二階を押し、閉じるボタンでドアを閉めた。エレベーターはゆっくりと下降を始めた。何か話を……とと思っているうちに、エレベーターはすぐ止まり、彼は軽く会釈をして降りちゃった。残念。

再び動き出したエレベーターは、徐々に降下速度を上げている。普通のビルとは思えないくらいに深く。どこへ連れて行かれるのかと心配していると、ふわんと減速し、箱の中に鋭く小気味のよい音が鳴り響いた。どうやら着いたらしい。

エレベーターを降りて右に折れた突き当たり。「第三研究室」というプレートがかかっているドアは今時珍しく手動みたい。その中から突然、大きな男の声が聞こえてきた。

「で、でえっきましたあ！」

何事かとドアノブをひねりながら、軽く押すけど全く動かず。仕方なく体重をかけて押し、ようやく出来た隙間に滑り込んだ。

「素晴らしいぞ。山川研究員！」

「所長！！」

目の前で繰り広げられるむさ苦しい男達の抱擁に軽いめまいを覚えていると、彼等はようやく私の存在に気が付いたように、満面の笑みを浮かべて言った。

「おお、ミスミ君だね。ご注文の「ゆめとくん」女の子バージョンだ！」

等と所長が手招く。おそろおそろ近づいて見ると、白いベッドの上に様々なコードにつながれた下着姿の女の子が寝ていた。長いまつげ、桃色の唇。美しい黒髪。これがロボット？ リアルすぎるわ。普通の女の子じゃないこれ。

「規格書では「ゆめとくん」の音声と仕草を代えるだけでしたが」

所長は大きく頷いた。

「今回は客のニーズに出来るだけ応えてみたのだ」

ちょっと待て。

「こんな子を売り出したら大人のおもちゃにされますよ！」

「その点は大丈夫だ。防犯システムは標準装備にする。彼女は身の危険を感じた場合、ありとあらゆる手段を用いて外部との接触を図るように設定してある！ ホントは武器も所持させたかったが、女の子が持つ物でもないからな。大音量防犯ベルに発光機能、他にもネットに介入して、アクセスしているモニターすべてにSOSを発信するようになっている」

充分武器になりそう。

「そこでだ、ミスミ君。一週間、ほたるちゃんを試してほしい。高性能家政婦機能及び秘書機能も標準装備してある。もちろん部長には承諾済みだ」

「ええ！？」

さては謀ったな、部長！ ここまでお膳立てされてたら、連れて帰らないわけにはいかないじゃないの！ 脳内で部長の顔に右ストレートをねじ込みながら、渋々頷いた。

「わかりました」

「よろしくたのむよ！ じゃあ早速起動だ山川研究員！」

「はい！」

古き良きSFを彷彿とさせる大きなレバーをがっちゃん而降ろすと、ピコピコ音を立てながら機械が作動した。目の前の女の子が柔らかそうな目蓋をゆっくりと開き、緑色の瞳で私を見る。...
...と、

彼女は顔をゆがませ、嫌そうに言い放った。

「誰この人」

ナニこの子。

「どういう性格設定したんですか！」

「つれない女の子は萌えるという意見もあったので、採用してみた」

「って！ 設定し直して下さい。物を頼むのにいちいち頭を下げるなんて嫌！」

「だ、誰もそんなこと言ってないじゃない！」

美少女が叫ぶな。

「ほおら、ほたるちゃん、服と荷物だよ。お姉さんと仲良くね」

彼等は荷物一式が入った紙袋を無理矢理彼女に押しつけると、

「じゃあ一週間後」

と、あんなに苦労して開けたドアをいとも簡単に押し開け、私たちは部屋から追い出されてしまった。

ぽつんと残された私は、美しく可愛くないほたるちゃんが持っているワンピースをもぎ取ると、彼女にかぶせた。

「引き受けた仕事は最後までやるのが私の信条よ。あんたもそのつもりでね」

溺れた人のようにじたばたさせながら服を着た生まれたてのロボットは、私の言葉に頷くところ言った。

「仕方がないから、付き合っただけよ」

可愛くないっ！

でも、さすがに彼女は有能だった。それに物言いはきついけど素直でいい子なんだよね。

「食事くらいちゃんとしなさいよ」

なんて言いながら朝昼晩栄養バランスを考えた物を食べさせてくれて、掃除も手早く、宇宙船の運転もお手の物。プログラムのなせる技とは思えないほど自然な動き。

職場に連れて行けば、男共は見た目も仕草も魅力的な彼女に夢中。今まで私の仕事だったお茶くみは彼女がやるようになった。部署全員の好みに応じたコーヒーを配り終わると、最後に私のところに来て、無造作にコーヒーを置いていく。

「ありがと。おいしいわ」

なんて褒めると、顔を赤らめながらそっぽを向いてこう言うのだ。

「べ、別にマスターのためにいれたんじゃないからね！ みんなのついでなんだから！」

こういうのを、『ツンデレ』というのだと、古典文学に詳しい田中が教えてくれた。こういうのが男心をくすぐるそうだが、私は理解できそうにない。

それでも二日経てば慣れてきて、気心の知れた女友達のようになってきた。

「ちょっと愚痴くらい聞きなさいよ」

一緒にベッドに入りながらそう言うと、

「仕方ないわね」

と言いつつ彼女はうれしそうに聞いてくれる。仕事の愚痴も人間関係も実家からの見合いの催促も適当に聞き流してくれるから、心地いい。でも、

「愚痴るのは私だけにしなさいよ。みっともないから」

この口が憎い！

そしてあつという間にお試し期間最終日。彼女がいなくなるのは清々するけど、ちょっと名残惜しい。彼女もそうなのか、今日は言葉が少ない。

大手おもちゃ屋の火星支店を後にして、ワープしようとしたその時だった。何かにぶつかったような衝撃と共に、宇宙船が沈黙した。彼女は懸命にキーボードを操作している。モニターに映し出された赤く点滅している故障箇所は、燃料タンク？

「だめ。燃料漏れで動かないわ。会社に連絡してみたけど応答なし。これは絶望的よ。向こうが見つけてくれるのを祈りましょう」

「って、宇宙のど真ん中で立ち往生！？」

「空気が減るから騒がないで。マスターの生命維持にすべての電源を回すから、照明カットするわね」

そう言いながら、ほたるちゃんは宇宙船の照明を落とした。一瞬まっ暗になったが、すぐに彼女の体が優しく光り、あたりを照らした。

「湯たんぽ機能も起動したから、だっこしたら？」

って、光る顔で迫るな！ でもだんだんと寒くなってきて、仕方なく彼女をだっこする。ふわんと優しい感触で温かい。でもまぶしい。

「ねえマスター。シレルさんとはどうなの？」

ちょっと！ 今そんなことを言う状況じゃないでしょ。

「……別に何とも思っていないわよ」

会社で見かけると目で追うくらいで。そう思っていると、彼女はふふんと鼻で笑った。

「私も素直じゃないように作られたけど、マスターも相当ね。夢の中じゃ、カ・レ・と」と、含み笑い。そういえば、彼女は人の夢も感知することができるんだ！

「人の夢覗かないでよ！」

「夢占いは標準装備だもん」

と言われて、はたと気が付いた。

「ねえ、ほたるちゃんの防犯機能って」

「ありとあらゆる手段を用いて外部との接触を図ります……って。マスター??」

私は彼女を押さえつけ、両手を縛り上げると長いロープにくくりつけ、ゴミ箱の中に押し込んでそのまま宇宙に放り出した。しばらくすると、

『ひどい！ マスター助けてよ！』

電源が落ちたはずのスピーカーから彼女の声が聞こえ、モニターに映し出された星図に救難信号が点滅する。これがほたるちゃんの防犯機能。恐るべし。

おかげで一時間もしないうちに私たちはスペースポリスに救出された。

数時間後。新聞もテレビもネットも、ほたるちゃんの話で持ちきりだった。いつの間に撮られたのか、まぶしく光りながら宇宙船にぶらさっている女の子の映像があちこちで流された。

私はといえば、スペースポリスに救出というより連行され、児童虐待と殺人未遂とネットジャックの疑いまでかけられたけれど、取り調べの結果、発売前のロボットの試験だったということで無罪放免となった。

ほたるちゃんは、「ま、マスターにしては良く思いついたわよね」などと言いつつも許してくれた。

この騒ぎで、ほたるちゃんは発売を目前に生産中止となり、代わりにあの防犯機能を改良した救難信号付き女神像「大発光ほたるちゃん」を売り出すことになった。もちろん宇宙専用。

そして今。彼女は、まだ家にいる。

私のベッドに潜り込み、可愛く微笑みながら、

「いい加減にシレルさんに告白しなさいよ。売れ残るわよ」

なんて憎まれ口たたくのだった。

END

「マスターがそんなじゃ、あたしの性能が疑われるじゃない！ ご飯くらいきちんと食べなさいよ！」

今日も朝から、桃色の愛らしい唇が、ちっとも愛らしくない言葉を紡ぐ。私は「ごめんごめん」と謝りつつ、今朝の会議で使う書類から目を離さずにフレッシュジュースを飲み、同時に耳はニュースを聞いている。

「そういうの、大事な時ほどポロッと出るんだからね」

なんて言いつつも、書類見ながら食べやすいようになって、わざわざ一口サンドイッチを用意してくれてるなんて、まめな子だわ。ロボットだけど。

噛みしめると、シャキッと切れの良いレタスの歯触り。ジューシーなトマトの酸味と甘味。こくのあるチーズはきっとラクノール星産ね。おいしい！ あ〜……この企画、また浮上して来たんだ。先だっの欠陥は一応修正……されてる、か。

「……るわよ」

「え？」

「ふ・と・る・わ・よ！ 考え事しながら食事すると！」

だんっ！ と目の前に置かれたのはフルーツ入りのヨーグルト。

わかってるわよ。でもね、今これに目を通さないと、仕事に支障が出るから仕方ない。

「マスター……」

二つの大きな緑の瞳が、じーっと睨んで……。もう、気になるじゃないの！

「わかったわかった」

企画書を閉じてサンドイッチを口に放り込む。と、

「大口開けすぎよ。はしたない！」

あなたは私のお母さんですか？

ほたるちゃんと暮らし初めて、早一ヶ月。

それ以前は、朝食なんて面倒だからサプリで済ませてたのよね。夜も同僚と外飯で済ますか、一人きりでレトルトかっ喰らうかしてたから、今の生活の方が嘘みたい。私が太ったとしたらそれは、ほたるちゃん、あなたの素敵なお食事のせいだと思うのよ？ ま、ぼろぼろだった肌や髪がなんとな〜く良くなってきたのも、そのおかげだけど。

こんな風にいつも通り出社して、会議の後にはいつも通りほたるちゃんを連れて営業所をまわって、いつも通りくたくたになって事務所に戻ってくる。

と、いつもは愛想のない課長がニコニコして私達を出迎え……、

う！ このパターンは！

「待っていたよ、ミスミくん。早速だが、三研に行ってきてくれないか？ 先ほど新しいサンプルが上がったそうでね。頼むよ」

い、今から？ あそこに？ 行かなきゃだめ……ですよね、やっぱり。

「……行きます」

がっくりと肩を落としながら正面エレベーターに乗り込み、向かうは地下三階。

地下二階から急下降していく、私の気分とエレベーター。

第三研究室、通称三研。ほたるちゃんの生まれたところ。

リストラ目的で作られたはずのその部署は、最近になって寝相占い付きロボット『ゆめとくん』、救難信号付き女神像『大発光ほたるちゃん』と続けざまに大ヒット商品を生み出し、いまや一番の稼ぎ頭。会社としても無視できなくなって、いろいろとサンプルを頼むことになったんだけど……。

でもね！ あそこの所長と山川研究員が作る物って、ろくでもないものばかりなのよ！

「マスター。襟が曲がっていますよ」

「え？ あ」

さすが秘書機能付き、よく気が付く。私は彼女がやりやすいように身を屈め、彼女は細く長い指で襟元を整えてくれた。

「できたわよ」

と、見上げるきれいな瞳。やっぱこの子、かわいい。

「ありがとう」

お礼を言えば、いつもの台詞。

「マスターのためじゃないわ。一緒にいるあたしがハズカシイからよ」

慣れたけれどもこの口が憎い！

地下三階。通路を歩いて行くと、現れる今時珍しい手動ドア。今度こそ間違えずにドアを引き開けると、

「所長でっきましたあ！」

「よくやった、山川研究員！」

これは前にも聞いた台詞だけど、その後で、

「よかった！！ 納期に間に合いそうです」

……え？ この声、まさか……

おそろおそろ覗いてみると、目に飛び込んだのはすらりとした体に馴染んだ高級スーツ。ずずっと視点を上げると、

「シレルさん！？」

ほたるちゃんがにやあと笑ってこっちをみてる。

分かってるって！ これってラッキー！ 神様ありがとう！ 課長ありがとーっ！

「ああ、ちょうどよかった。ミスミ君。紹介しよう、商品開発部のシレル君。今回の企画の発案者だ」

シレルさんはニコニコしながら握手を求めて右手を差し出す。私は迷わずその手を握り、緩みそうになる頬を引き締める。ああ、所長の横だと、三割り増しかっこよく見えるわあ。これが掃き溜めに鶴というやつね！

「よろしく、ミスミさん。そちらがオリジナルのほたるちゃんだね」

シレルさんはほたるちゃんにも握手を求め、ほたるちゃんは極上の笑顔で握手しながら、

「いつもマスターがお世話になってます」

って。出来過ぎよ、ほたるちゃん！ 照れて火照った頬を両手で隠していると、所長が、

「それで、またミスミ君に試験を頼みたいのだが」

「はいっ！ 喜んで！」

二つ返事で引き受けた。だってだって、それってシレルさんのお仕事の総仕上をお手伝い出来るって事でしょ？ いいに決まってるじゃない！

「それでその、試験品のほうは？」

「山川研究員！」

「はいい！」

じゃじゃーん！

効果音付きで彼が出してきた透明ケースの中を見て、私は仰天した。

「お子様向けフィギュア『ジョニーちゃん』の姉妹品で、通信機能搭載の『もしもしほたるちゃん』だ！」

って、ええええ〜〜！？

「さすがにこの大きさを秘書機能や家事機能は無理だったが、日常会話なら三カ星系語をなんなくこなすし、通信機能はそこらの携帯通信端末に引けを取らないぞ！」

「すばらしいです所長！！」

がしいっといちいち抱きつくんじゃない！ 三研のアホども！

ほたるちゃんがケースの中を見て、横にいる私にだけ聞こえる声で「やだこいつ」とつぶやく。

.....だよねえ。

だってケースの中身は、まんまミニチュアサイズのほたるちゃんなんだもん。

それに、相変わらず無駄に追求されたリアルさ。小さいのにディテール懲りすぎ。これじゃ今度こそ大人のおもちゃ確定よ！

「ホントにすごいですよ。これなら小さな子どもが持っていても違和感がないし、話相手にもなってくれる。お友達感覚でつきあえるリアルフィギュア！ これ、売れますよ！」

絶句する私に追い打ちをかける様な、シレルさんの満面の、笑み。熱くフィギュアを語ってくれるな、あこがれたその顔と声で。

「最初はジョニーちゃんのボディに通信機能を付ける方向だったのですが、それは無理だからと言われましてね。時間もなかったんで、ほたるちゃんの仕様で作って頂いたんですよ」

はあ、たしかに、その方が早いデスね.....って、よかった。シレルさんの趣味ってわけじゃあないのね！ ほっ。

「ね、ほたるちゃんにそっくりなこの子なら売れると思わない？」

シレルさんがにこにこほたるちゃんに微笑む。ちょっ、彼女の前でそんなこと言ったら機嫌が悪くなっ.....てない？ あら、意外にも素敵な笑顔。

「うれしいわ。私の妹みたいなものね」

ほたるちゃんは、ケースの中の人形を片手でそっと持ち上げて、目の高さに合わせると、ミニチュアほたるちゃんに微笑んだ。

「でも、ほたるはふたりもいらないでしょう？ この子に他のお名前、付けて下さる？」

小首をかしげて上目遣い.....って、こらこら、シレルさんに色目使うな。シレルさんも赤くならない！

「そ、そうだなあ。じゃあ、ティンクというのはどうだろう？ あ、でもこれ、ジョニーちゃんシリーズ用に準備してた名前の一つだから、気に入らなければ.....」

「いいえ、素敵なお名前」

そう言ってにっこり笑い、ケースに自分のミニチュア、ティンクをそっと戻すほたるちゃん。

「それじゃあ、この子は私がお持ちしますね、マスター。 そろそろ失礼致しましょう」

そ、そうね、そろそろおいとましましよ……と、殿方に軽く会釈をして部屋を出ようとする、ほたるちゃん、ちらりと横を見て言い放った。

「三研のおじさまたち？ いいかげんにお風呂に入らないと、女性に見向きもされなくてよ？」

硬直する所長と袖口を嗅ぐ山川研究員、そして苦笑するシレルさんを横に見ながら、私はほたるちゃんに続いて外に出た。ほたるちゃんの手元には、ケースに入った、彼女のミニチュア。

「ホント、そっくり」

ほたるちゃん……その笑顔、かなり怖いんですけど。

自宅に戻ると、早速テスト開始。説明書にざっと目を通して、エネルギーパックを充電。ああ、やっぱりほたるちゃんよりも充電スピードは格段に速いわ。

ほたるちゃんが冷蔵庫から、下ごしらえしてあった食材を出して夕飯の支度をする間の、ものの十分で充電完了。

「ええっと？ 起動するには……うっ！」

この宇宙数億人のお母さん方が、顔をしかめること間違いなし。背中のスイッチならぬ、胸をぽち……って、こんなところにスイッチを付けるなあ！！

いつの間にか横から覗き込んでたほたるちゃんも、苦い顔。

「あの人達の考えそうな事よ」

生みの親に向かってそんな……と苦笑している間に、小さなティンクが動き出し、そして私は身構えた。だって、ほたるちゃんがベースなのよこの子！ 忘れもしないほたるちゃんの第一声って、

「おはようございます」

そう、おはようございま……え？

ぺこりと礼儀正しくお辞儀して、私を見上げてにっこり笑顔。うわあ、かわいい！ いつも見ている顔とサイズしか違わないのに、すごい新鮮！

……っと、はしゃいでいる場合じゃない。ええっと、

「機能説明をしてほしいんだけど」

そう聞くと、ティンクはすらすらと答えてくれた。

「はい。私は、小さなお子様を対象とした商品です。第一に、おしゃべり機能で小さなお子様の話し相手になれます。第二に、通信機能を使って通話及び所持者の位置確認が出来ます。第三に、暗いところでは全身が発光し、足下の安全を確保します」

へえ、あの人達が作ったにしては、ずいぶんまとも。

「ありがとう。よくわかったわ」

「恐縮です」

「でも子ども相手にその口調はちょっとね。ねえほたるちゃ……ほたるちゃん？」

隣にいたと思ってたほたるちゃんは、いつの間にかキッチンに戻って黙々と食事の支度を続けている。呼びかけても顔も上げない。ほたるさーん？ もしもーし……。なんだかいつもの十倍冷たくないですか？

その時だった。

「マスター、お電話ですよ」

ティンクが、細い手足でえっちらおっちらと私の服を昇り始めた。うひゃ、くすぐったい。

どうするのかな、とそのまま観察してみる。ティンクは肩まで登り切ると、私の耳元に顔を

寄せ、ささやき始めた。

『こんばんは。ミスミ君』

三研の所長の声！？

「は、はい。こんばんは？」

『おお、ちゃんと通じているようだね』

通信機能のテストか。意外にも仕事熱心なんだよな、この人たち。

「はい。ティンクは今、耳元でおしゃべりしていますよ」

『おお、ちゃんと動いているのだね！ 素晴らしい！！』

向こう側で、『所長！』『山川研究員！』と、いつもの声が聞こえて頭が痛い。

『小さな子どもだと電話を紛失するから、通信機が歩いて来てくれれば、便利だと思ったのだよ、ミスミ君！ 作戦は成功だ！！』

み〜み〜も〜と〜で怒鳴るなあああ！！

怒鳴っているのはティンクなのに、聞こえるのは所長の声。まるで所長自身がささやいているよう……話の内容は仕事の内容なのに、ぞっとする。

「ところでミスミ君、明日は休みだと聞いたが？」

な、なに？ まさか！？

『ショッピングモールで通信テストをしたいのだが、火星のTAMASIMAYAまで来てもらえないか？』

は？ なんて所長とショッピング！？ いやいやいや〜ん！！ 仕事とはいえごめんだわ！

と、思っていたら、

『私も行くはずだったのだが、生憎他の仕事があつてね。悪いのだがシレル君と二人で行ってレポートをまとめてくれないか？』

え……シレルさんと……？？

明日の休みなんて、何をしようか迷っていた位なのに、いきなりシレルさんとデート！！

「はい！ 是非」

もちろん即答。

『それでは、明日11時に正面玄関だそうさ。シレル君にも伝えるよ』

「はい。わかりました」

『では、健闘を祈る』

夢のよう。あのシレルさんと、デート……。

ほわわんと頭の中にシレルさんの顔が浮かぶ。これも、ティンクのおかげね。

ティンクが素敵に笑ってたから、おもわず抱き上げて胸に押し当て、抱っこした。

「ありがとう、ティンク」

「どういたしまして、マスター」

さあ！ 明日は何を着ていこうかな？

そう思いながら振り向くと、そこにはほたるちゃんの顔が！

「うわあ！ びびびびっくりした。ど、どうしたの！？」

思わずのけぞると、ほたるちゃんもびくっとして、顔を赤くしていった。

「べ、べつに！ なんでもないったら！」

……え？ もしかして、ほたるちゃんもぎゅっとしてほしかったの??

もう。その膨らんだほっぺも、とがった口もかわいいんだから！

「ほたるちゃあん」

両手を広げてぎゅ〜っとしようとしたり、ほたるちゃん、よけた。

「じゃれてないで、さっさと夕食食べてよね！ 片づかないから！」
もおお！ この広げた両手はどうすればいいの？

次の日。いつもより少しだけおしゃれして、メイクもちょっと念入りにしてみた。
ほたるちゃんは呆れ顔で、それでも私の支度を手伝ってくれている。

「マスター、今日は仕事なのよ？ そんなに気合いを入れなくても」

「だって、シレルさんが誘ってくれたんだもん」

実際は誘ってきたのは所長だけど、ね。

「で……、この子連れて行くんだ」

じと〜とした目で充電器の上に横たわるティンクを見つめている。

「だってこの子のテストだもの。子ども向けの商品だから、入念にテストしないと」

何かあってから補償する、ではすまないことだって、あるんだから。

「くれぐれも気をつけてよね。この子に何かあったら困るから！」

意外。昨日機嫌が悪かったの、てっきりティンクが気に入らないんだと思ったのに。

「ほたるちゃん、ありがとう。ティンクのこと、気にかけてくれてるのね」

「ち、ちがうわよ！ この子のことなんかこれっぽっちも気にかけてなんかないんだからね！」

素直な言い方ではないけど、気になって仕方がないのね。そういうところ、かわいいと思う。

TAMASIMAYAは街一つ分くらいあるショッピングモールで、個性的なお店がたくさん入っている。その正面玄関もかなりの広さがあって、人出も多い。シレルさん、どこにいるのかな？
探し始めた丁度その時、

「マスター。お電話です」

と、ティンクが鞆から出てきて、服をよじ登り始めた。その体をそっと持ち上げて肩に載せると、ティンクは耳元でささやきはじめた。

『こんにちは、ミスミさん。今どこですか？』

シレルさんだ！ うわ、あ。耳元でシレルさんの声なんて、贅沢！！ きっと心配してかけてくれたんだわ！ 所長の時とは大違い！

「はい、今ちょうど時計の前に……」

言いかけたとき、シレルさんを見つけた。

「あ、いましたね」

耳元のティンクが通信を切って、そのまま肩に腰を下ろした。シレルさんがこっちに来る！
どどど、どうしよう。と思っていると、シレルさんがにっこりあいさつしてくれた。

「こんにちは。急にごめんね。ほたるちゃんもこんにちは」

「こんにちは、シレルさん」

ほたるちゃんはすごくいい笑顔。……緊張するわ。でもあいさつは大事よね！！

「こ、こんにちは。今日はあの……」

お招きありがとうございます？ それとも、誘ってくれてありがとうございます？ どう答えようかと思っていたら、シレルさんが微笑んだ。

「早速行きましょうか。食事中に電話が来たときの対応を見たいので、少し早いのですが、ランチにしましょう」

それが新製品のテストってわかっていても、うれしいことに代わりはないわよ。

「はい！」

うわあん！ シレルさんとランチ～！！

って、ほたるちゃん、そんなにつつかないでよ。

少し歩いて、洒落たレストランに入った。こんなおしゃれなところ、いつ以来かな？

店員さんがそそと椅子を引いてくれて、私とほたるちゃんが座るのを待ってから、シレルさんは席に着いた。そして、ウェイターに三人分のランチを頼もうとしたら、ほたるちゃんが、一言。

「もったいないわよ」

って……。ロボットだから、ご飯が食べられないことはわかってるけど、ほたるちゃんの前になんか何もないなんてちょっと……ね。

「でもね、ほたるちゃん」

「いって言うてるでしょ？ シレルさん。お願い」

きらきら〜とした緑の瞳で圧倒するほたるちゃんに、シレルさんはにっこり笑って承諾した

。

「じゃあ、ケーキセットを頼むよ。あとで僕が食べるから」

と、機転を利かせてくれた。さすが。

そして、食事は和やかに始まった。ティンクの開発のいきさつや、三研の人たちの話、それに会社での仕事の話。こんな風にシレルさんと話が出来るとは！

ティンクはセンターのお花の近くで頷きながら聞いていたし、ほたるちゃんも、にっこり笑って紅茶を飲むフリをしてくれている。

「やっぱり、ほたるちゃんには食べる機能があるといいでしょうね。僕の方から三研に頼みましょうか？」

ほたるちゃんの様子を見ていたシレルさんが言う。するとほたるちゃんは、

「あたしはこれでいいのよ。あたしまで食べると、食費が」

なんてこと言うのよお！！ と、ほたるちゃんを睨むと、ほたるちゃんは私の視線をそらして

、

「シレルさん、そろそろ試験を」

と、促した。

「そうだね。じゃあ」

彼は小さく「失礼」と言うと席を立ち、お手洗いに行ってしまった。

しばらくして、センターにいたティンクがいきなりハミングで歌い出した。

「な、なに、これ」

戸惑っていたんだけど、ハミングはすぐに終わり、ティンクがこちらを向いて、にっこり笑った。

「マスター、ただいまシレル様からお電話がかかりましたが、お食事中ですので保留とさせていただきます」

保留……って、勝手に保留にするなああ！！ 貴重な耳元ささやきシレルさんの声があ……。なんて残念に思ったけど、まあいいか。これはこれでアリね。子どもが食事中に電話に気を取られちゃ、やっぱりいけないものね。

戻ってきたシレルさんは、にっこり笑って、

「何も言わずに保留にされてしまいました。やはり保留になる前にひとことあったほうがいいですね」

と、あくまでビジネスライク。それでも耳元でシレルさんの声、聞いたかったな。

食事が終わって、今度は人混みの中での通信テストをしようということになった。

ティンクを肩口にのせて歩いていたその時、突然後ろからどん、と、衝撃が。とっさに踏ん張ったけど、慣れない高いヒールが災いして、ガクンとバランスを崩し、ひざをついてしまった。

「いったあい！！」

「マスター！？」

「だっ、だいじょぶ。それよりティンクは！？」

転んだ拍子に壊れたんじゃないかと慌てて辺りを見回したけど、地面に落ちた筈のティンクがどこにもいない。全身の血の気が引く。顔を上げると、ティンクを持って走り去ろうとする年配の男をシレルさんが追いかけていくところだった！

うそお！！開発中の新製品が盗まれるなんて、前代未聞の大失態！

「待ちなさい！」

人混みに阻まれながら、男を追うシレルさん。犯人はオートタクシー待ちの列に無理矢理割り込んで、丁度ドアを開けていたタクシーに乗り込んでしまった！

シレルさんは必死にタクシーの前に立ちはだかって、発進を阻止してる。

行かなきゃ！ 私のせいなんだもの。

.....なのに、膝を打った脚、上手く力が入らない。じたじたする私を、支え起こしてくれたのは、ほたるちゃん！？

「ほら、すりむいたところ、みせなさいよ。」

そう言って携帯していた救急セットを取り出す。

「それどころじゃないでしょ！ ティンク取り返さなきゃ！」

「大丈夫でしょ、たぶん。.....あと10秒」

「へ？」

間抜けな声を出してしまった私にはお構いなく、

「打ったとこ、腫れるかもね.....6.5」

カウントダウンと傷口の消毒を続ける.....

「ほ、たる、ちゃん？」

ごっくん、と喉が鳴った。何が起こるの？

「.....3.2.1」

0！

彼女の桃色の唇がそう動いた直後、タクシーが閃光を放った。

爆発！？ 一瞬そう思ったけど、まぶしく光るタクシーの中からジリリリリリリリ...！ って鳴り響く大音響は

「これ、ほたるちゃんの.....」

と同じ防犯機能？ 仕様が一緒だからって、ティンクにも取り付けていたの？

なっ、何考えているの、あの人達！！

「やっぱりね。三研のおじさま達、融通が利かないからそうじゃないかと思ったのよ」

人々が呆然とする中、目を細めてよく見れば、シレルさんが音と光の中でうずくまっている。

「シレルさん！」

立ち上がろうとする私を道の端に座らせ、ほたるちゃんは素早くタクシーに駆け寄った。後部座席を開け、中へ！

間もなく光と音は止み、街は静寂を取り戻した。

ざわざわと辺りがざわつき始め、人だかりが出来てきた。その中をかき分けながら、ほたるちゃんが戻ってきた。でも、

どうしたの？ そんな泣きそうな顔して.....まさか.....

彼女がおずおずと差し出した手の中には、ヘンに曲がって動かないティンク。よく見ると首に亀裂が入って、黒い煙が一筋、たなびいて.....

「うっ.....そおおお！！！」

「だって、だってこの子が悪いのよ？ ちっとも止まらないんだから！」

ほたるちゃんはものすごい勢いで弁解して、それからうつむいて.....それきり黙ってしまった。もしかして、落ち込ませちゃった？

「ほたるちゃんは悪くないよ。うん」

仕方ないよ、壊さないと止まらなかったんだから。

そう、変なところに起動スイッチ付けたのも、余計な機能を付けて周りを混乱させたのも、みいいいな三研が悪い！！

でも、ごめんなさいシレルさん。

彼女の髪を撫でながら、私はがっくりと肩を落とした。

火星警察が駆けつけた時、ひったくりの犯人は白目を剥いていたらしい。至近距離であの音と光に曝されたんだから、自業自得とはいえ気の毒に。そして、おそろべし防犯機能。

私たちはといえば、「事情を聞きたい」と、警察署に同行を求められ、ひったくりの被害者であることと、開発中の商品のテストの事を説明した。結果、待ち時間込みで二時間ほど勾留&お説教された末、無罪放免となった。

そうそう、ひったくり犯は、なんとほたるちゃんが大好きで、ほたるちゃんのフィギュアを見て、思わずひったくってしまったそう。さすがに本人をさらおうとは思わなかったらしいんだけど、手のひらサイズのそっくりさんを見て、つい...ですって。魔が差したって、こういう事をいうのかしら？ 今はすごく反省しているって。

事情聴取が終わって廊下に出ると、同じく同行を求められていたシレルさんが、壊れたティンクを見つめ険しい顔で沈黙していた。

「あの、ごめんなさい。こんな事になっちゃって」

深々と頭を下げる私に、シレルさんは、

「ハプニングですからね。仕方ないですよ。それに、どのみち、あのままでは売り出せませんでしたから」

そう言って苦笑した。う～ん、たしかに。

その後、ティンクでの失敗を考慮・修正して、ジョニーちゃんシリーズから「もしもしジョニーちゃん」が発売された。躯体はジョニーちゃんがベース。余計な機能を全て取っ払い、通信用のおもちゃとして販売されたそれは、耳元でささやく機能はもちろんのこと、通訳機能完備で、遠くの星系とも連絡が取れる優れもの。男性にもウケているというのが微妙な感じだけど。

ティンク自身はといえば、修理されて、三研で活躍しているらしい。引き受けろって言われなくて良かった。

そうそう、これには後日談があって、なんとティンクの防犯システムに目を付けた警備会社が、防犯グッズの開発を依頼してきたの。もちろん担当は三研。

そうして製品化されたのが、「大発光ほたるちゃん」の姉妹品、その名も「防犯ほたるちゃん」。

シール型の防犯装置で、高価な物を運ぶときとかに運搬ケースに貼って、運搬担当者や警備員など特定の対象者から20メートル離れると、大発光大音響で居場所を知らせるという画期的なもの。その上、ある特殊な光線を浴びせなければはがせないようになっているから、安心。

取り扱い簡単、軽くて十分な効果に、クライアントも大満足だそう。

そしてその表面を飾るのは、警備会社の制服姿で微笑むほたるちゃんの似顔絵。ん～、どっちかって言うところの笑顔の印象はティンクの方なんだけど、ほたるちゃんもかわいく笑えばこん

な感じよ？

欲しいな、ってねだったら、サンプルを一枚くれた。どんな反応するかな、と思ってほたるちゃんに見せてみたら、

「何に使うのよ？ そんなもの」

なんて冷たい反応。

でも、見ちゃったんだからね。

私がシャワーを浴びて部屋に戻った時、置きっぱなしだったシールと、じーっとにらめっこしてたの。鏡の中の自分とシールのティンクを見比べて……

鏡に映った、シールとお揃いの笑顔。

あ、気づかれた。

「な、なに見てんのよ！」

「なあんにも！」

ほたるちゃんのクリスマス

「あたし」には、「お兄ちゃん」がいる。

量産品の方じゃなく、プロトタイプの「お兄ちゃん」は、あたしの元になっただけあって、とても優秀で、かわいくて……けど、「あたし」とは大きな違いがある。一つは言うまでもなくボディの性別。もう一つは、性格設定。

お兄ちゃんに関係した人からの評判を聞けば、とにかく性格がいいということ。

設計者の意向で、古典文学に出てくる“つんでれ”とかいう性格にセッティングされたお陰で、あたしはお兄ちゃんとは真逆の意味で、「イイ性格」してるなんて言われる。それが仕様なんだから、クレームがあるなら設計者に言って欲しい。

それに、それはあくまで感情の表現型の話。ロボットに生まれたからには、マスターが喜んでくれる事をするのが第一。……ただ、それに憎まれ口のオプションが付く。

あたしのマスターは、あたしを生み出した大手玩具メーカーの社員で、ミスミさんっていう妙齢の女性。あたしには、どんなマスターに仕えても対応できるよう、いろんなタイプの人間のデータが入ってるんだけど、あたしのマスターは、仕事はAクラスだけど、私生活の管理はEクラス。なにせ、分別してボックスに入れるだけで再生処理にまわされるはずの生活廃棄物がボックスに収まってない。「食事」は人間にとって「楽しいこと」に分類されるはずなのに、放っておいたらサブリ飲んで済ませてしまうし。

服のセンスは、最近の流行情報に照らし合わせてみても、いい方みたいなんだけど、

「ああ〜〜〜っ！ これ着ていこうと思ったのにい！」

言ってる傍からマスターの叫び声。

そう。マスターの服はよく汚れる。というのか、よく汚す。

「やっちゃった」とか言いながら、ショーユのついた真っ白のブラウスを手に途方に暮れてたり、「げげ！」なんて変な声に振り向けば、ウールのスーツにケチャップこぼしてたり。今回は手に口紅が付いてるのに気づかずに、その手でシルクのスカートをつかんじゃったんですね？

汚した服つかんでワナワナ震えないで下さい。

潤んだ目で、ちらちらこっちを見ないで下さい。

「……わかったわよ！ 染み抜きすればいいんでしょ？ サッサと出さないよ」

とたんに、顔をぱあっと輝かせて……

「うわあん！ ほたるちゃん恩に着るう」

踊らなくてもいいでしょうに。でもこのマスターのリアクションが、あたしの行動力ゲージをあげてくれる。人間風に言えば、やりがいを感じるってことかしら。ロボットにとっても、これは大事なことなのよ。

染み抜きをしながらマスターの様子を窺うと、服に合わせたアクセサリを念入りに選んでる最中。これはもしかして……。

「どうしたの？　ようやく遅い春がきた？」

もお！　こんなこと言いたいワケじゃないのに！

けど、マスターはいつものことと怒りもせず、大笑いしながら答えてくれた。

「そうじゃないって。会社の忘年会！」

「？　一昨日やったのはなによ？」

「あれは部の。今度のは本社の忘年会！　せっかくのクリスマスだってのに。社長も何を考えてるんだか、ねえ」

マスターの話を経合すると、今年の「SAMAYA」は、「大発光ほたるちゃん」の大ヒットもあってかなり儲けたらしい。「もしもしジョニーちゃん」と「防犯ほたるちゃん」も好評発売中で大ヒット間違いなし。だから、社長の一存で全社員を集めた忘年会をするんだって。しかも、全員盛装。クリスマスだから、ということみたい。

「な～んだ。だったら、この服よりもピンクのドレスの方がいいじゃない」

「ああ、バーゲンの？　あんまり安かったから思わず買っちゃったけど、あれはちょっと」

「どうして？　露出度高めで、アピールするにはいいわよ？」

「って、誰に何をアピールするのよ！」

「もちろん、シレルさんに、女を」

「いやああん！！」

真面目に嫌がらないでください。ホント、めんどくさい人がマスターになったものね。

「あ、そうだ、ほたるちゃん。あなたの服、買いに行かなくちゃね」

え??

「どうして？　汚れてもほつれてもないし、必要ない。もったいないよ」

ロボットのあたしは人間のマスターみたいに、有機物を摂取したり排出したりしないから、一張羅のワンピースには汗染みも食べこぼしもつかない。肌触りなんて気にする必要がないから、ホコリや汚れの付きにくい素材で出来ていて、よほどの事が無い限りきれいなままだ。それに... ..マスターの稼ぎでは、生活費ギリギリのはず。だいいちあたしの電気代、並の家電なんかと比べものにならないくらいかかっている。一応会社から補助は出てるけれども、それでも。

「だあめ～！　あなたも一緒に忘年会行くんだから。仕事だと思って、我慢して」

我慢も何も。マスターの命令は『絶対』てことになってるんだけどな。

わかってます？　マスター。

で、連れてこられたのは火星の『TAMASIMAYA』の中にある店。品がいいからって、会社の人に勧められたんだって。

「これなんかいいんじゃないかな？　黒髪によく映えると思うよ」

そう言って差し出されたドレスを見る。.....あの、このドレスの値札、マスターのよりゼロが二つほど多いんですけど。

「そ、そんなの、似合うわけじゃない」

ぷいっと横を向いて、買わないでって意思表示したつもり。

「そうお？　可愛いと思ったんだけどな。じゃあ、こっちは？」

あたしの瞳の色に似た、若草色の、シルクのドレス。背中が開いていてちょっと大人っぽい。

でもって値段は……

「デザインが嫌い」

「これは？」

真っ白の、フリルがいっぱいドレス。腰のところがくびれていて、ふわんと傘のように広がったスカート。前が短くて後ろが長い。可愛い。けど……

「スカートが短すぎ」

「これなんてどう？」

ああもう、なんでそんな熱心なんですか！？

店員と一緒にあって、次々あたしに服を着せようとするマスターは、すごく楽しそうでうれしそう。でも値段見てない。絶対見てない！

「い、いらんって言うてるでしょ！？ しつこいわね！！」

だから、逃げ出すことにした。「え～～ 好みうるさいのね～」なんていいながら、服を探すマスターが向こうを向いてるうちに、そっと。呼び戻す声が聞こえないように、素早く。だって「戻りなさい」なんて聞こえたら、従わなきゃならないじゃない。ロボットなんだもの。

デパートの中はとても広くて、それだけで一つの小さな街のよう。こんなに広大で入り組んでいたら、マスターは見つけれないと思う。

マスター、もっと自分のことを見なくちゃダメです。

髪を振り乱して一生懸命お仕事して、食事だってあたしが気をつけてないとすぐ抜いちゃうし。サプリメントや栄養ドリンクの山を片づける時、あたしがどんなふうを感じてるか、わかります？ あたしのために買おうとしてるそのドレスの金額で、マスターが何回食事できるか解ってます！？

きちんと食べて健康でいて下さいと言いたいのに、出てくる言葉は、

「バランス考えて食べなさいよ。肌ぼろぼろよ」

睡眠不足は体に悪いですよ、と、言いたいだけなのに、

「ちゃんと寝ないと早く老けるわよ」

なんて偉そう。

片づけが苦手だから、つまづいて転んで怪我をするんじゃないかと思えば、

「こんなにだらしくちゃ、男も逃げるわよ」

あ～あ。

会ったこともないけど、お兄ちゃんみたいに言えたら通じるのかしら？ あたしは、マスターに健康でいて欲しいのに。幸せでいて欲しいのに。

クリスマスキャロルが流れる店内を走り回って、いつの間にか大きな広場にたどり着いた。15階まで吹き抜けの広場中央には、大きなクリスマスツリーが設置してあって、赤や黄色や青の電飾がピカピカと光っている。

ホログラムの雪が、上から舞い降りてきては、積もることも足許を湿らせることもなく消えていく……。

その横には、長々と続くスイーツのブース。たくさんの親子連れがケーキを買っていく。

幸せそう。

マスターは、隣に誰がいたら、幸せなんですか？
やっぱり、シレルさんかなあ……。

その昔の悪い冗談で、クリスマスケーキに関する物があつたっけ。24日に売れ残ると、上のイチゴだけを取り替えて翌日に出したとか、25日を過ぎると誰も買わない事を女性の年齢になぞらえて、25歳すぎたら売れ残りとか。女性蔑視も甚だしいと思うけど、マスターを見てると心配になる。

あたしは結婚できないけど、マスターの赤ちゃんはお世話とか、してみたいんだから！

「マスターの、バカ」

あたしはエネルギーはまだたっぷりあるにも拘わらず、ベンチに座りこんで、そのまま動けなくなってしまった。

「あれ、ほたるちゃんだよな？」

しばらくして、誰かがあたしの名前を呼んだ。

あのニュースを見た人、かな？ あたしは瞬時にFクラス警戒モードになった。だってあの後散々だったから。取材は押し寄せるし、中にはマスターを悪い人だと思いこんで、「助けてあげるね」なんて言いながら あたしを連れ去ろうとする勘違い者もいたりした。

声の主はケーキ屋のカウンターのの中の、パティシエ服の男の人だった。

「今日は一人で買い物？」

彼はカウンターから出てくると、あたしに歩み寄ってきて、ハンカチを差し出した。

「人間に更に近くなつたって聞いていたけど、涙も流せるんだ。すごいなああの人達」

それを受け取って、出てしまった涙に気が付いた。あたしの涙は眼球保護が主な役割で、あとはトラブル回避用に流して見せたり、いろんな使い道があるんだけど、制御できてないなんて。一体いつの間に……。

あたしの困惑をよそに、感心したように頷く彼、あたしのメモリーにある顔だ。念のため店の名前を確認すると、フォーチュンサービス。宇宙一を豪語するお菓子屋さん。やっぱり……

その時、

「ほたるちゃ～ん」

マスターの声？ もう来ちゃったの？

すると男の人が私の手をつかんで、

「こっちにおいで」

そう言ってあたしを店の中に招き、カウンターを通り越して、作業スペースも通り越して、その奥にある扉を開け、

「ここでじっとして。すぐにあいつがくるから、ゆっくりしていつて」

と、にこにこして、行ってしまった。

あいつって、まさか。

耳を澄ませば、マスターのあわてふためいた声がある。私の名前も聞こえる。なだめる男の人

の声もする。どうしようと思っていると、通用口と書かれたドアが開いて、男の子が入ってきた。予想と違う顔にあたしは警戒モードになる。でも、そんなことはお構いなしにその子はあたしを見るなり、にんまりと笑って言った。

「初めまして、ほたるちゃん。今聞いたんだけど、泣くんだって？ 今度その機能付けて貰おうと」

って、何のこと？

「今日は来てよかった。まさか忘年会の前に会えるとは思ってなくて。あ、服は買って貰ったの？ ミスミさん、すごく楽しみにしてたんだけど。どんなの？」

「あ、あんたには関係ないでしょ！？」

「あるよ。だって、君のエスコートを頼まれたせいで、僕は今までよりも大きめのボディに交換させられて、テラーさんとは一緒にベッドで眠れなくなって、すごく迷惑被ってるんだから」

「あんた、……誰」

「兄にあんたはないでしょ？」

めっ、って言いながら、男の子は私の額を指ではじいた。

エスコート？ ボディの交換？ 兄……

「って、お兄ちゃん！？」

「大正解。ほたるちゃんに三千点」

うそ。データと全く違う顔してる。

第三研究室初のヒット作、『ゆめとくん』プロトタイプ。すごくリアルだって聞いていたけど、市販品の『ゆめとくん』とは全く別物で、しかも年齢も5歳くらい上に見えるんだけど……？

でも、お兄ちゃんなんだろうな。サーチしてみたなら体温分布とか人間と全然違うし、聴覚レベル上げてみたけど呼吸音とか聞こえないし。

それにしても、

「三千点って、なに？」

「大昔の娯楽番組の台詞。テラーさん、そういうデータ見るの好きなんだ。で、どうして泣いていたのか、聞いてもいい？」

そう言われて、あたしは頷くしかなかった。

「マスターがね。あたしのためにいろいろとしてくれるのが……」

困るの。服もなにもいらぬの。マスターがいれば。もう他のマスターのところに行くとか、考えられないもの。

お兄ちゃんはにっこり笑って優しく頭を撫でてくれた。

「僕たちはロボットなんだから。深く考えないで、マスターのすることを補佐すればいいんだと思うよ」

「でも……」

「なによりも、ミスミさんは、君のことが大好きなんだから。君も、マスターのこと好きでしょ？」

「でも、このままじゃ破産しちゃうよ！ マスター、経済観念全くないんだから！ もしそうになったら、一緒に暮らせなくなるじゃない！ そんなの困るもん！」

思わず大声で叫んじやったら、

「そんなことで破産なんてしませえ〜ん！！」

って、マスターの叫び声。

振り向けば、マスターがものすごい形相で立っていた。

「あ、あんたを引き取って、後悔なんて全然してないんだから。あんたが私のことを好きかどうかどう

かなんてのは別としても、私はそう思ってるんだから！ それに、女の独り暮らしを舐めるんじゃないわよ！ あんたを一生養っていただけの稼ぎくらいはあるんだから！！」

真っ赤な顔して、一生懸命説明してくれて……。その顔が、

「ブサイクになってるわよ、マスター」

って、どうしてこう、口が！！ でもマスターは、

「そのブサイクに、一生付き合っただけの貰うからね！ もちろん子どもだって孫だって面倒見て貰うんだから！ それくらいは働きなさいよね！！」

て、叫ぶから、

「わかったわよ！ 面倒みてあげるわよ！ 老後も他人になんか任せるんじゃないわよ！」

売り言葉に買い言葉。

テラーさんが苦笑して、お兄ちゃんは思い切り吹き出して、マスターは、思い切り抱きしめてくれた。

忘年会当日は、クリスマス。忘年会会場にはホログラムの雪がゆっくりと降ってきていて、すごくきれい。大きなクリスマスツリーはきれいに飾り付けられて、市販品のお兄ちゃん達が、愛想を振りまきながら飲み物を配っていた。

あたしは、結局マスターが買ってくれた白くてフリルがいっぱいのドレスを着て、お兄ちゃんのエスコート付きでパーティーに出席した。得意先の社長さんとか、会社の偉い人とかにもあいさつに行ったりね。

「きれいだよ。服」

小さな声でほめるお兄ちゃんは、ちょっと性格が悪いと思う。「仕様と違うんじゃない？」って聞いたら、それはテラーさんと暮らし始めたからなんだって。

「性格プログラムに問題があるみたいなんだ。おかしいと思って調べてみたら、経験の蓄積が影響を及ぼすようになってるんだ。完全な設計ミス。ほたるもそのうち、性格が変わっていくと思うよ」

それが成長というモノだって、お兄ちゃんが言った。

「成長するの？ あたし」

「そうしたら、ボディも代えてもらいなよ。それからこれ」

お兄ちゃんが手に何かを握らせてくれた。手のひらに載るくらいの、小さなピンクのハート型。このついているコネクタって、

「エネルギーパック？」

「ミスミさんに頼まれたんだ。家に帰ってからでも試してみて」

こんなに小さいと2時間が精々だけど、とりあえず受け取る。

「そうそう、性格プログラムのことは内緒にしておいて。成長を止められるのは面白くないから」

「もしかして……口止め料なの？ これ」

くすくすっ、と、性格の悪くなったお兄ちゃんが「さあね」と笑う。

なんかあたし達、そっくりね。

その夜。

お兄ちゃんがくれたエネルギーパックで充電してみた。エネルギーに満たされながら、いつもとちがう感じがしているのに気が付いた。

決して不快じゃない。口の中が……なんて言うか……マスターにぎゅってしてもらった時感じたのと、ちょっと似た感覚？

幸せっていいのか、もしも味覚があるなら、これが甘いって事だと思う。

「へえ……ロボット用のクリスマスケーキって、こういうのなんだ」

感心しながら説明書みたいな手紙を読んでいたマスターが、笑った。

「テラーさんが勤めているフォーチュンサービスって、お菓子をデリバリする会社だって聞いて、頼んでみたの。今回は『ゆめとくん』が作ったみたいなんだけど。どう？ おいしい？」

マスターがすごくうれしそうに聞く。ピンクのハートを見つめながら、お兄ちゃんを思い出してみた。

「僕たちは成長している」

お兄ちゃんは言った。

あたしも成長、してるんだよね？

だったら……。

思い切って、素直に頷いてみた。

「うん……ありがとう」

マスターは目を真ん丸にした後、めちゃくちゃうれしそうに、あたしをぎゅ〜っと抱きしめてくれた。

END